

### 第三部 赤軍派批判

連合赤軍のあさま山荘闘争と「処刑問題」以降、赤軍派の思想的、政治的解体は一層急速に進行している。一方で、大菩薩組やハイジャック(H・J)闘争獄中メンバーから、様々な総括文書が提出されており、他方で、山谷・釜ヶ崎にねらいをつけた組織活動が進行している。だが、そのような活動そのものが、一層の解体を意味しており、また更なる解体を促進している。指導的諸個人の意見は、明確な論争の形式は取ってはいないが、部分的ではあれへだたりに読み取る事はいとも簡単である。このような解体は、六九年安保決戦を頂点とする六〇年代後半の階級闘争の、そしてそれまでの新左翼運動の飛躍への過渡期の第一段階たる六九年秋闘争、連合赤軍闘争が終った事を最も象徴的に物語っている。そもそも赤軍派の誕生そのものが、六九年に限界を示した六〇年代後半の反政府闘争を決定的に権力打倒闘争へと転化する事を主観的には表現していた。その敗北と解体は、党建設の次の段階と、次の大会戦の準備が、どのようにしてなされねばならないかを裏側から示しているだろう。

今号においては特に、(I)党(一軍)建設路線批判、(II)八木パンフ批判、として徹底的に赤軍派を批判し遂ぐす中で、その事が問うている、事態の本質、問題を浮ぼりにした。

#### 「烽火」二七六号、72年9月・八木沢二郎『鉄鎖を砕け』NO1・72年10月掲載

### 赤軍派の党(軍) 建設路線批判

資本主義批判を更に深化させ、党の

綱領・組織・戦術を獲得せよ

党の立脚点・路線問題として

総括は行なわれねばならぬ

「連合赤軍」問題に関して、様々な総括文書が提出されている。「序章」No.八の八木、上野、川島氏「情況」花園氏、「査証」塩見氏、らがそれである。

上野氏は、三種の軍隊建設として総括を行いつつにいう。「ゲリラ戦士が天から降ってくるわけがなく徐々に成長するものである以上、成長の度合いに応じて、兵士を八三種の軍隊に配置するならば、事態は、救われるのである。」(「序章」No.8)

塩見氏は、総括の視点を、路線問題一般においてはならず「路線方針問題や、その他の諸問題も現在の攻防の原因になっていきますが、主要な矛盾は「罰状の在り方とそのブルジョアの敵罰主義」に根本があり……」

(「査証」No.三)

他の諸君は、おおむね、政治路線とのかかわりで総括を行っている。花園氏は「森は勿論、一貫して武闘の路線転換に抵抗し、極左空論の連続蜂起をわめきました」(「情況」No.六)また、塩見氏も「今すぐ直接の社会主義の実現をめざすのではなく、全人民を統合する『反戦・反ファッショ・生活危機突破・

人民々主義革命』を提起しなければならぬ」(「査証」三)このように政治路線上の問題としては、八木氏らを降いて、人民主義革命論と、他方で、連続蜂起ではなく革命戦争が主張されている事にある。

以上、簡単に見たように、「連合赤軍」問題の総括を通じて、赤軍派に生じている傾向は、次の二点に要約する事ができる。第一に、人民主義革命論の主張によって、第一次ブンド以来、我々が日共との党派闘争を通じて主張してきた社会主義革命論の(それが、赤軍派の諸君が指摘するように、また、我々が、この間、かさねて主張してきたような弱点を有しているにしろ)放棄が行なわれており政治路線上、日共への陣地のあけわたしを行なっている事、また、かくする事によって山谷・釜ヶ崎の活動にみられる人民の組織一般へ風化の現象を実践的には準備している。第二に塩見氏がいつているブルジョアの敵罰主義等々の作風上の問題である。ここでは、作風問題を、党の立脚点から切りはなして抽象化し、共産主義的、とかその他の空論ですませるか、また毛沢東の人民内部の矛盾論を、何の規準もなく持ち込んだり、あるいは、新左翼運動の党派闘争主義(内ゲバ主義)の批判を行なったりであり、要するに、党風作風、規律といった問題が、基本的な組織論(それを裏打ちする党の立脚点)から切断され無規準なものとなっているのである。具体的赤軍派の敗北から、解体の現状、その特徴は、以上の二点に要約できる。

武装プロレタリアート。

軍建設から党へ、の破綻

我々は、まず、後者の点から検討してゆく。

塩見氏もいごとく、問題を、一般的に政治路線上の問題に

還元してはならないが、その事は、執準問題を抽象化して論じる事は、心がまえ以上の域を出ない。問題は党の立脚点、組織論にまで深化させなければならぬ。だが、この点での総括は、八木氏を除いて、ほとんど展開せず、従って、結果は、組織の解体をもたらずの当然の帰結である。

赤軍派は、その活動の根拠を「世界武装プロレタリアートの存在におき、そこから、一方で六九年安保決戦時の前段階蜂起を主張し、また他方で、その敗北後、国際根拠地に依拠した連続蜂起を提起して70年3月H・J闘争を展開した。この世界武装プロの指定は「赤軍No四」の塩見論文、かの「大歴史、中歴史、論として、いわば形而上学的体系的試みがなされたのであった。

この武装プロレタリアート論は、塩見氏にあっては、基本的に現在でも引きつがれている。「ロシア革命の成立をもって、プロレタリアートとブルジョアジーの階級関係は産業資本主義・マルクスの時代、古典的帝国主義・レーニン（初期・中期）の時代の階級関係たる防衛、対のプロレタリアートの受動関係とは異なる、プロレタリアートが主動的・活動的關係に立つ「世界革命の功勢の段階」（「査証」No二）

このような、党の活動の立脚する地点を明確化する事自体は、第二次ブントの止揚のため欠く事のできない不可避の課題であった。

つまり、第二次ブントが、戦略戦術の党といわれるように世界同時革命戦略をはじめとした主張をもって六〇年代後半のとりわけ10/8/69年階級闘争を領導したといえ、それは、一向過渡期世論に代表されるように、三プロック階級闘争の統合、国際第三潮流論として、いわば、当時の国際階級闘争の実体論的、あるがままの把握にすぎず、このような運動から党を指定するという転倒したものであり、不断に党組織は、諸々の傾向、

たとしても、論争が、組織をどのようにつくりあげていくのかという事以上に主要な論争の階級闘争一般に対する問題提起の性格を色濃く持つのである。

今述べた赤軍派の立脚点と、そこからもたらされた軍建設↓党建設路線は、しかし、どのような帰結をもたらしただか。それを最も端的に語っているのは「序章」No7の塩見論文である。（この論文は、総じて、解体への道を加速させ、連合赤軍結成へ帰結せんとしていた赤軍派をなんとかして再集約せんとする、解体直前のギリギリの緊張感をただよわせ、従って、広範にわたって問題の所在の指摘をした論文である）。

そこで、組織問題として語られている事は、一方で、中央軍の自然発生性と、そこから来る党の解体現象、逆に政治局は、この軍に対して外から、外在的にしか指導できないという軍の告白である。

「党の軍人化、軍の中の党化であり、これを通しての、党の正しい結合、関連の保持である。これを通じて党は自らの共産主義的加造を開始し、自らの古き、保守性、非軍事性を克服するのである。軍はこの党と結合し、自らの不断の絶対化を克服し、自らの部分性を全体的なものに高め、将と兵は政治的、思想的に団結し、軍は人民と結合するのです。……」軍が党を作り、党が軍を作る。党と軍との関係は、かかる党の場所性を確認した上で極めて適切な表現である。

軍は不断に、自己自身の絶対化と闘い、自己自身を党に高めてゆかねばならない。党の改組とは党を完全に軍事組織の機能に還元してしまふことではないこと。党の主力を、軍として改組し、これを新しい党の母体として、従属的だが不可欠な中央政治機構を媒介に、革命戦線や国際的外延化闘争、宣伝理論闘争を堅持しなければならぬ。軍のこれらの機能の軽視、切り捨て、あるいは機械的従属強要と、さらにその反対の反帝戦線、

組織無政府主義、解党主義を生み出さざるを得なかった。従って、党の、いわばコベルニクスの転換はいずれにしても必然なものであった。そのようにして、赤軍派の武装プロレタリアート論が、また、ややおくられて神奈川県委「左派」の党共産主義の母体論と永続世界革命戦争論が、また田原理論が提起された。

赤軍派は、この武装プロレタリアート論にもとずいて、前段階蜂起を根拠づけ、更に、組織問題でもレーニン「何をなすべきか」は、もはや古くなつたのだと主張した。塩見氏は、最近でもこう言っている。「つまり『何をなすべきか』に根拠付けられた古典的帝国主義の時代の革命論の核心たる「蜂起」——これに向けての意識的計画的な全国政治新聞に媒介された世界革命戦争の有機的革命家の組織の団結では、非軍事性、非社会革命の指導性結合体への弾力的対応性に於いて、全く不十分であり……」（「査証」2）。そしてレーニン党組織論にかえて、

軍建設から党建設というドブレ主義が導入された。

従って、赤軍派の諸君は、この武装プロレタリアート論——軍建設——党建設論という、自らの活動を最も基本的に規定すけた問題の総括を行なわねばならないはずである。現に、処刑問題は、そのような党の立脚点もたらしたものだからである。その点を欠いて、どのように、規律問題、作風を論じても決して、総括にはならず、赤軍派の再生の道はないのである。

例えば、花園氏の戦略問題の提起、上野氏の北ベトナム労働党に関する評価や紹介、これらの中に、我々もまた学ばねばならないいくつかの点があり、他の諸氏が提出している問題も、それが、事柄のある種の側面を明らかにしようとしている事は事実だとしても、総じて、これらは、赤軍派の誕生以来の立脚点のかかわりは不明確である。その事は論争の形式にも現われており、例え主要な主張者が、獄中にいるという条件があつた。

国際活動、理論宣伝闘争の絶対化、独自化と党は闘争しなればならない。（「序章7号」、P・22）

だが、ここで言われ、それ以降、広範に主張されている、人の要素の重視、前衛の軍人化、軍の中の党も決して問題にはならなかった。そして、それは当然だったのだ。何故ならば、いかに人の要素を毛沢東にならって強調しても、人の要素とは、個々人の問題ではなく、党組織の変革の問題であり、その事を媒介せずに前衛の軍人化をおし進めても、それは、個人的な幹部の軍への配置であり政治局——軍の関係として外的に現われている矛盾が、軍の内部の矛盾として現われる事の相違にしかすぎない。この事を上野氏のように三種の軍隊といつてみた所で事態が、少しも改善されるわけではなく、三種の軍隊のそれぞれ内部と、三種の軍の関係の矛盾として依然として問題が生起する事は、自明の事であろう。

このような、脈絡を通つて、この、人の要素、前衛の軍人化の党、によつて矛盾は中央軍の中に凝固してき、それを解決すべく、いわゆる、共産主義化がなされねばならなかったのである。

### 党母体論・ソビエト主義を生

#### みだした第二次ブントの弱点

その事を最も典型的に示しているのは、いわゆる森上申書であり、そこでいわれている、共産主義化を戦い取る、である。そこで意味されている事的具体の内容は、一方では、武装闘争（特に銃火器など）に際して（現実的にそうなるか否かは別として）必ずある死の可能性に耐えうる絶対者への要求であり、また、その事は、現実の隊内生活で生じる様々な問題（政治上の問題、男女関係、財政、食糧 etc）を絶対的無矛盾的に

解決した団結の形態をつくり出す志向である。このよりな絶対的規準からすれば、政治・軍事路線上の意見の相違も、また闘争に対する動揺も、また隊内生活上の個々の現われに對してもこの共産主義化からの逸脱と感ぜられるのは当然であり、共産主義化の名において処刑問題が発生する根拠を讀み取る事に困難ではない。ここで、いわれて共産主義化はレーニンがいう、いわゆる創神主義にまで接近した極限に近いものである。だが、この事は、一人森のみの問題でない事、このよりな共産主義化へ行きつく根拠が、赤軍派誕生以来の武装プロレタリアート論、軍・党建設路線の中に存在していた事は、これまでの検討で明らかである。

以上見てきたように、赤軍派の軍建設・党建設というドブレ主義、だが、この軍建設路線が、不断に自然発生性を軍内部にもちこみ解体の危機を生みだす所から来る、前衛の軍人化、軍の党（塩見）による、共産主義化の要求、だが、この共産主義化とは、ある場合は、塩見氏が、体系化、する形而上学であつたり、ある場合は、いわゆる隊内共産主義としての絶対的平等や、その共同生活の中で、永遠の今、を見るものであつたり、更に、つき進む所、ほとんど、実体をもたない個の恣意にまで抽象化させたものにすぎない。だが、どのようによ、共産主義化をはかつても、現実の階級闘争は、組織に影響せずにはおかないのであり、そこから来る組織の危機に對しては、一層の、共産主義化が要求されるという悪矛盾を生み出さざるを得ないのだ。

このような帰結は、つまるところ、我々が、赤軍派との党内、分派、党派闘争を通じて、一貫して主張してきたように、党の革命を媒介とした軍事組織の建設として問題をたてないことによるものである。このよりな組織も、それが、革命を目ざす以上自己の活動の

## 12・18路線・資本主義批判の

### 革命的意義とは何か

ル主義への屈服)、後者も共産主義運動を現にある階級闘争から切断了地点に描き出さんとするのである。我々は、12・18路線で、このよりな兩者に対する闘争を通じて、第2次ブントの現にある階級闘争にそのまま依拠し、その傾向性に立脚し、それを実体化する事から出発させるのではなく、そのよりな階級闘争を生み出さずにはおかない資本主義に對する原則的批判に党の立脚点をおいたのである。それは、マルクスやレーニンが、そうしたからという外的な理由によるのではなく、第2次ブントの総括、また現実には、党の武装・軍事組織建設を通じての事なのである。

12・18路線が、後にも述べるように、また赤軍派の諸君が批判するよう「理論闘争主義」(序章)No8(川島宏論文)的傾向を生み出したとはいえず、宇野、黒田らの反スタマルクス主義批判を通じて、資本主義の原則的批判を党の基礎にすえたという事は、画期的地平なのである。

赤軍派の諸君は、八木氏を除いて総じて、この資本主義批判の実践的意義に無理解であり、その事が、さまざまな問題提起にもかかわらず、そのすべてを限界あるものとしている。その点では、ほとんどの諸君が、事実上ブーハーリン主義者である。一九一九年のポリシエヴィキ党綱領改訂に際して、資本主義批判を基礎におかず、帝国主義の要約から出発するブーハーリンに對して、レーニンは「運動の終局目標が、現代のブルジョア社会の性格とその発展行程とによって規定されているということをしめす事にある……」(レーニン全集26・10)と批判している。

立脚点を持たねばならない。関西ブント↓第2次ブントは、現実の運動に立脚する事から出発した。従つて、それは三期論では、労働者政治組織として、第2次ブントにおいては三プロック階級闘争と第三潮流として、己れが立脚すべき勢力をい、実体的には反戦・全共闘として、さらにその限界性の中からR・G地区軍団として、清勢の中で階級闘争の傾向性を抽出し、それに組織形態を与える事によって、革命を成就する立脚すべき力としたのである。

このように階級闘争の傾向性を抽出し、それに組織形態を与えて実体化する時(いわゆる藤本進治主義)、党はその組織形態の傾向性に依りて、組合主義や、戦闘団主義を生み出さずにはおかず、また、解党の危機を生み出さざるを得なかつた。この事をふまえるならば、何らかの絶対者を創出し確固不動の党的団結を形成する事こそ急務であると感ぜるのは当然であり、そのようにして、「赤軍」No四「向論文」や、逆に右からは、日向の、概念的把握のガイスト、なる森羅万象をなで切れると称する、方法論体系、なるものが生み出された。後者は、そのよりな方法論体系によって世界に客観的に認識した認識者の集団たる党が、運動を領導し、それをソヴィエト形成へと導びいてゆくものとして、革マル風に解体された大衆運動主義、ソヴィエト主義としてたち現われる。前者は、世界武装プロレタリアート論にもとづく、いわゆる高次の自然発生性を徹底的に権力闘争として組織する事を目ざして前段階蜂起、HJ闘争を展開しつつ、この自然発生性の組織への流入による敗北を通じて、軍建設とその、共産主義化、を目ざし、そこに、いわゆる党共産主義の母体論が生み出される。だが、このよりな二つの傾向は、両方とも第2次ブントが有していた二つの傾向の極大化した形であり、前者は、現にある階級闘争からはなれて、党を認識者の集団とする事によって革命的実践から切断了し、(革マ

赤軍派の諸君が、軍建設・党建設から、軍の自然発生性の克服として、前衛の軍人化、軍の党へと進み、それを通じて、共産主義化を主張しながらも、それは、ついに共産主義化に到達し得ず、まったく別種のものへ変質してしまつた。これは、あまりにも当然の事であり、そのようにして共産主義化が、なし得るはずもないのである。共産主義は、未来のあるべき状態ではなく現実の運動である。(ド・イデ)というのは、資本主義社会で賃金奴隷として存在しているプロレタリアートが、不可避に資本主義社会への反抗を生み出さずにはおかず、共産主義運動はこの階級闘争以外のものではなない事を意味している。むしろ、このよりな階級闘争は、さまざまな段階を通過して成長してゆくのであり、ラディカルな運動でもありうる。だが、それは、賃金奴隷としてのプロレタリアートの存在そのものによる解放へのおたけび以外のものではなく、共産主義運動は、このプロレタリアートの存在そのものからする資本主義批判に現実の階級闘争からはなれてはなない。だが、このよりな階級闘争が、いまだ自然発生的だというのは、それが、「到達目標」を明確にしていず、運動の未来を代表、「宣言」してないからである。それは、古典経済学の批判を通じて形成された資本主義批判(「資本論」)と結合する事によって、はじめて科学的になり共産主義運動となるのである。また逆に、経済学批判としての資本主義批判は、現実のプロレタリアートの資本主義批判に階級闘争に結びつく事

によって、批判の武器を武器による批判へ物質化しうる。

我々が、宇野経済学を批判したのは、宇野が、経済原則—経済法則、三段階論による現状分析、を主張する事によって、経済学から資本主義批判(宇野のいう「イデオロギーの排除」)の立場を取り除き、「資本主義の運動を一応肯定的なもの」として、その法則性の認識にすりかえ、共産主義運動と、プロレタリアートの現実の階級闘争との結合環を取り去り、認識者の運動へとおいこんだからである。また、その事は、宇野経済学に典型化されているだけであり、日本の反スタ運動が、ことごとくおちいつている傾向だからでもあった。塩見氏に代表される赤軍派も、自らの立脚する立場を、唯物弁証法、史的唯物論、だとか、能動的反映論としての認識論、「(序章)No.7塩見論文」だとかいふのも、結局、そのような認識のための体系化(『形而上学』の創出)と、そのような認識者の運動として共産主義運動を描き出す事によって、そのいう所の、共産主義化、は、軍建設—党建設の組織論と結びつく時、究極において共産主義運動の基礎に絶対者を求めるといふ所に行きつかざるを得ないのである。

我々の12・18路線が、「理論闘争主義」を生み出したというのは、次の事を意味している。

12・18路線以降の党的実践は、厳格な意味では組織実践を欠落させた所に根本的弱点を有していた。即ち、資本主義批判は確かにマルクスによって古典派経済学(スミス・リカード)の批判として体系化された。だが資本主義批判はこのように学的体系のみ一面化させ、実践はもっぱらこの理解(学習)と、あとは旧来の政治経験で行なうものではない。資本主義批判は賃金奴隷としてのプロレタリアートが現実の階級的闘争として批判する実践でもある。であるが故にこの両者の資本主義批判は結合出来るし、また結合しなければならぬ。

党の綱領的立場に導かれた戦略にあるからである。

我々は、次に、花園氏や塩見氏を中心に提起されている戦略問題に検討を移さねばならないが、だが、このような戦略論や、いわゆる政治路線を提出する前に、赤軍派の諸君は、武装プロレタリアート・軍建設から党への総括を行なう事なしには、決して再生への道はない事、また、戦略問題自身が、決定的な誤まりを生み出しもする事を知らねばならない。

その事によって資本主義批判ははじめて実践的になり得る。

だがその事は次の問題を提出する。即ちプロレタリアートの実践階級闘争の最高の段階とはいうまでもなく政治権力をめぐるプロレタリアート独裁をめざした政治闘争であり、従がってプロレタリアートの階級闘争は、根本的には賃金奴隷という事に根ざしつつ(いわゆる経済的基礎)それはブルジョア国家権力の打倒(プロレタリアート独裁の樹立をめざした政治闘争として高められねばならない。であるが故にマルクスが「自分の発見は階級闘争の存在を明らかにしたという点にあるのではなくそれがプロレタリアート独裁と結びつかねばならないという事を明らかにした事である」といったのである。我々のあやまりや、またそれを今だに保守している赤報派の行きづまりとは、今いった意味での組織実践を喪失しているという事である。更にまた赤報派が「赤報」No.2で主張していることは、いわゆる経済的基礎の主張とそこから国家暴力装置及び、プロレタリアートの民族的属性の喪失から国際主義をいつているのにすぎない。だがこのように提起は、先に述べた如く、資本主義批判が学説としての理論的体系(経済学批判)であると同時に、それがプロレタリアートの資本主義批判階級闘争、その最高の発展として政治闘争とならねばならない事を欠落させた組織実践の喪失にあるのである。更にこのような資本主義批判はいわゆる党派闘争でもその党派闘争をもっぱら資本主義批判の学的内容から短絡させ(中核『社民論』毛沢東『ナロードニキ論』)党派闘争をプロレタリア独裁をめざす最高の政治闘争として把握しない理論闘争主義である。このような立場では現実の党派再編(党派闘争に有効な政治方針を打ち出せず、増々観念主義になつていさざるをえないのである。

我々が現在理論作業の中心環を「戦略問題」の確定においているのは、この資本主義批判の二つの側面を結合させるのが、